

## 〈書評〉

## 高橋均著『サンディーノ戦記—ジャズ・エイジのヴェトナム戦争—』(弘文堂、1989年)

評者：杉山 茂  
(京都大学大学院)

## I

1930年代後半と1960年代のニカラグア経済の発展を牽引した綿花の最大の輸出先は、実は日本であった<sup>1)</sup>。しかも、本年2月の選挙で勝利したビオレタ・チャモロ政権は、日本からの経済援助を要請している。今後、日本とニカラグアとの経済関係はこれまでにないほど深いものになるであろう。しかし、革命や選挙のニュースにもかかわらず、ニカラグアと日本との関係は、疎遠であったように思える。とりわけ、20世紀前半までのニカラグアの歴史は我々日本人には疎遠なものであった。その「遠い国」の歴史を分かりやすく紹介した書物があらわれた。高橋均氏の『サンディーノ戦記』である。

日本においてニカラグア史研究が行われる意義は、ただに現実的要請だけによるものではない。19世紀後半に片や生糸を片やコーヒーという農産物を外貨獲得の手段とし、同じように世界資本主義に向かって国内市場の門戸を本格的に開きながらも、日本が帝国主義の補完物として東アジアにおいて資本主義化に成功したのに対し、ニカラグアはセラヤ政権が殖産興業政策や義務教育制度を試みたにもかかわらず失敗した。このような「近代化」の道筋のみならず、米国のニカラグア支配、たとえば金為替本位制度の樹立と、日本による朝鮮支配の過程で行われた金為替本位制度の樹

立—これらはほとんど同時期に行われた—との比較検討は、我国における植民地支配研究に新しい視角を提示するものとなろう。

これまで、日本におけるニカラグア史の研究は、加茂雄三氏の論稿や、細野昭雄・遅野井茂雄・田中高氏による研究などにみられるようにきわめて限られたものであった<sup>2)</sup>。しかも、20世紀前半のニカラグアの具体的な事件を本格的に扱った単行本は、皆無とってよかった。本書は、そうした空白を埋める第一歩となる業績である。

また、本書は中米史研究の「先進国」米国における古典的な中米史や米国外交史研究を縦横に駆使して、1910年代から1930年代にかけてのニカラグア・米国関係史の統一的な像を提示している点でも、現在のラテンアメリカ史研究の課題に答える優れた業績であるといえる<sup>3)</sup>。

## II

さて、本書の紹介に移りたい。本書は二つのモチーフに貫かれている。ひとつは、サンディエーノとその運動とを等身大に描くこと、ふたつめは、米国の対ニカラグア政策の理念と失敗を詳細に描くことである。著者高橋氏は、これらを基軸に据えながら、米国が初めて本格的に直面した「低強度戦争」の実態を明らかにしている。しかし、著者の意味する「低強度戦争」とは、米国海兵隊とサンディエーノの「国家主権防衛軍」との戦いに限られるものではない。本書の副題「ジャズ・エイジのヴェトナム戦争」が示すように、著者は本書を通じてサンディエーノの戦いが、ニカラグアばかりでなくヴェトナム戦争、さらにはグラナダやパナマ侵攻などと共通点を持つものであることを想起させようとしている。この副題は、著者の現代史的な関心の深さをよく示している。

一読者として評者が、本書の特色としてまず第一にあげておかなければならないのは、その読み易さである。本文はもとより、巻頭の「アメリカ合衆国と中米・カリブ地域」および「ニカラグア北部」の地図と「登場人

物」一覧が読者の大きな手助けとなっている。錯綜したニカラグアの政治過程や、次々に登場する米国外交官・軍人の経歴が一目でわかるようになっており、評者はこの「人物表」を繰り返し参考にした。

本書の構成は8章からなり、第1章から3章で1920年代前半のニカラグア史と米国のニカラグア政策のみならず中米・カリブ政策史を検討し、サンディエーノの戦いの前史を明らかにしている。第4章でサンディエーノの生い立ちと決起にいたる過程を明らかにし、第5章から7章は、サンディエーノの戦いの進展に応じた章立てが行われ、第8章でサンディエーノの暗殺をめぐる事情が説明されている。読者は、章をおうことによってサンディエーノの戦いを中心に20世紀初頭から1930年代までのニカラグア政治史と米国のニカラグア政策を鳥瞰することができる。では、次に本書の詳しい紹介に移りたい。その際、本書で描かれている錯綜した政治過程を章ごとに追うよりも、本書の魅力をはっきりさせるためにニカラグア史からみた側面と米国外交史からみた側面に分けて考察したい。

### III

本書の第一の魅力は、20世紀初頭から1930年代までのニカラグア政治史を、サンディエーノの運動を中心に明らかにしている点であろう。

とりわけ、ニカラグア革命の父であるアウグスト・セサル・サンディエーノの思想形成を明らかにした第4章を評者は興味深く読んだ。南部高地のコーヒー地主の知識人の家に生まれ、蔵書にも教育にも比較的恵まれた少年時代やホンジュラス、グアテマラそしてメキシコへの出奔の過程での資本主義世界との出会い。著者は、サンディエーノの思想形成を、メキシコ革命の熱冷めやらない石油の町タンピコでのサンディエーノと、米国の干渉に抵抗するメキシコ政府や労働運動との出会いを通じて語る。まさに「タンピコはサンディエーノをつくった」のである。さらにフリーメイソンやスピリチュアリズムという合理主義では割り切れない宗教的・思想的側面にも

光をあてて、サンディエーノの忍耐強い戦いを支えた精神力を説明しようとする。

また第5章では、中国国民党北伐軍に「サンディエーノ旅団」ができるなどサンディエーノの戦いが民族解放運動の国際的なシンボルとなっていたこと、第6章では、「アメリカ人民革命同盟(アプラ)」やコミンテルン、これに深い関係を持つ「全米反帝国主義同盟」など国際共産主義運動との出会いと離別など、20年代後半の革命運動・反帝闘争との関連のなかでサンディエーノが語られる。そして第7章では、世界大恐慌の影響の中で「ニカラグア国家主権軍」の勢力が拡大する一方で、スピリティズムの宗教的影響によって自己の殻に閉じ込もってゆく孤独なサンディエーノの姿を明らかにし、第8章では、「国事のために剣を取った」サンディエーノが、米軍の撤退にともなって講和に応じ、「ただちに畑に戻って土を耕しはじめる」ために構想した「農業共同体」の計画を読者は知ることができる。

評者は、このようなサンディエーノの生い立ちを追いながら、サンディエーノの運動の世界史的な位置を思い描いた。1920年代から1930年代にかけて、ニカラグアだけではなくブラジルや中国、バルカン半島で、半ば「匪賊」半ば「革命家」という二つの性格を合わせもった農民運動が簇生した。ホブズボームが *social banditry* と名付けたこれらの運動とサンディエーノの運動とは共通点があったのだろうか。サンディエーノの運動には、*social banditry* に特徴的な「ある社会全体の崩壊や、新しい階級と社会構造の台頭、自分達の生活様式の破壊に対する共同体全体あるいはその構成員の抵抗<sup>4)</sup>」が反映されているのだろうか。著者は、ニカラグアの農民は「どのような動機で同郷人でもないサンディエーノをかつぎあげるにいたったか、その社会的・経済的背景はよくわからない」と指摘しているが、サンディエーノの運動を世界史の中に位置づけるには、その運動と、当時のニカラグアを構成していた畜産業とコーヒー農園を経営する大地主 *hacendado* やそのもとで働く農業労働者 *mozos*、都市に居住しつつコーヒー農園を経営する *finquero*、それに自給農民や商工業者、セラヤ政権下で生まれてきた都

市労働者、カリブ海岸のプランテーション労働者との関係を明らかにすることが課題となるであろう。

一方、著者は、実際のニカラグア滞在経験を生かして、ニカラグアの植生や地勢、当時の交通・通信事情を随所にはさみながら、サンディーノや彼のもとで活動した「将軍」たちの軍事活動や戦術をいきいきと描写している。また、第7章のように、1961年に結成され1979年に革命を達成したFSLN(サンディニスタ民族解放戦線)成立の事情にもふれながら、サンディーノの運動をニカラグア民族解放運動史の中で立体的に描いている。

著者は、さらに、錯綜したニカラグア政治史を分かりやすく読書に提供している。第1章では、19世紀前半の中米諸国内の対立やニカラグアにおける保守党・自由党の地域的対立、モスキート・コーストの歴史が明らかにされ、さらに、第1章の後半では1909年に始まる内乱や自由党対保守党の対立、1911年の親米ディアス政権の成立を、第2章では、保守党政権内部の対立を、第3章では1926年のエミリアノ・チャモロの反乱と自由党の蜂起、第5章では1928年のモンカダ自由党政権の成立、第8章では1933年のサカサ政権の成立とソモサの台頭、サンディーノの暗殺にいたる過程というように、米国による選挙管理や政治的に中立な「国民警備隊」の創設に対抗したり、利用したりしながらなんとか権力を維持しようとするニカラグアの政治家たちの駆け引きが、丹念に跡づけられている。特に、アドルフォ・ディアスやルイス・メナ、エミリアノ・チャモロ、フアン・バチスタ・サカサ、ホセ・マリア・モンカダ、アナスタシオ・ソモサら、ニカラグア政治史上の要人たちの人物像や彼らと米国政府との駆け引きの様は、興味をひく。

ところで、本書によってニカラグア史を追いながら、評者はニカラグア史上のいくつかの問題に気がついた。まず、米国の干渉がニカラグア政治史の流れ、とりわけセラヤが率いていた自由党に与えた影響に関心をもった。本書では、ニカラグアの自由党と保守党との対立は、中規模農家を後背地としてひかえ、コリントという外港を持つ商業都市レオンと牧畜業を

中心とした大地主の都市グラナダとの地域的対立として説明されている。しかし、19世紀末からの鉄道の伸張や1922年のマナグア・マタガルバ間の道路完成によって、政治都市マナグアは政治・経済の中心としてグラナダやレオンを凌駕した。セラヤもサンディーノの父も、マナグアやその勢力圏出身の熱烈な自由主義者であった。このようなニカラグア史の文脈に米国の干渉による傀儡政権の設置、とりわけグラナダ出身のチャモロの持った影響はどのようであったのだろうか。

また、セラヤ政権と米国傀儡の保守党政権との性格の相違も明らかにする必要があろう。たとえば、ニカラグアは比較的フロンティアが豊富であった。スペイン人植民当初100万人いたとされる原住民が一万人以下に激減したためである<sup>5)</sup>。セラヤ政権はこのフロンティアを国有地に囲い込む一方、その分配を通じて政権を維持していた。ティアス政権でこの国有地分配に大きな変化があったと指摘されているが、それはどのようなものであったのであろうか<sup>6)</sup>。この他に、教育政策や教会政策、経済開発政策など、セラヤ自由党政権と米国干渉後に成立した諸政権の国内政策の比較も必要であろう。サンディーノたちの闘争の理由には、「反米」のみならず、保守党政権の国内政策への反発も含まれる可能性があるからである。

経済の側面から見てみると、第一次世界大戦までニカラグアの主要な輸出相手国は、米国ではなくフランスとドイツであった<sup>7)</sup>。第一次世界大戦後の対米国依存の深まりとニカラグア政局、特に自由派の動きとの間にはまったく関係がなかったのであろうか。また、1929年に始まる世界恐慌は、ニカラグアのコーヒー生産のみならず、バナナ生産にも甚大な影響を与えた。従来、農業の近代化に無頓着だった地主層は、農業生産の近代化に意欲を失った。しかし、1930年代の後半にはいると地主層は、肥料の積極的使用や機械化を伴う綿花生産に目を向け始める<sup>8)</sup>。これら地主層の動きとソモサの台頭、サンディーノの運動の凋落との間にはどのような関係があったのであろうか。

これらの研究課題の解決は、しかし、本書とは別の研究書を持たなければ

ばならないだろう。なにしろ米国の研究者の間でもニカラグア社会史は「処女地 virgin territory」なのだから<sup>9)</sup>。しかし、高橋氏による本書はこれらの研究課題に立ち向かう勇気を奮い起こしてくれる。

#### IV

本書は、ニカラグア政策を担当した国務省官僚や公使、さらに大統領や歴代の国務長官の人物像を織り込みながら、20世紀初頭の「棍棒外交」から1930年代の「善隣外交」に至るまでの、侵略国であった米国のニカラグア政策を詳細に論じている。これが本書の第二の魅力であろう。

第1章では中米・カリブ政策における米国の政策理念が、「国際法秩序」の確立や米国の安全保障の確立、選挙に基づく正統な政府と中立的な軍隊の創出にあったことが明らかにされている。しかし、これらの政策理念のニカラグアにおける遂行は、決して首尾一貫したものではなかった。第2章において著者は、ニカラグア政策を担当した国務省ラテンアメリカ部の1920年代前半の体制を紹介する一方、政治的任命によって就任したジョン・E・レイマー公使のような、外交官としての資質を欠く公使の失敗によって米国のニカラグア政権が大きく左右される有り様を克明に描き出している。1924年のロジャーズ法で領事から公使に昇進する道が開けた。専門家としての外交官が活躍できる法的・制度的準備が整ったのである。しかし、第3章にみられるように、領事経験の豊富な公使でさえ、ニカラグア政局に翻弄されてしまう。また、この第3章では米国がメキシコ革命やボルシェヴィズムの「脅威」によって抑制を失い、ニカラグアへの第2次干渉にのめり込んでいく過程が示されている。著者は、20世紀はじめにメリット・システム(功績主義)による専門的外交官の養成をはじめたばかりで、まだ「革命」にナイーブであった米国の外交の稚拙さを、ニカラグア政策を通じて明らかにすることに成功しているのである。

これら、米国の外交遂行主体の条件ばかりでなく、著者は、国務省の政

策を規制する米国内外の事情にも広く目を配っている。第2章では、1920年代の孤立主義的な傾向の中で、自国のニカラグア政策に批判の声をあげ始めた米国の進歩的な雑誌『ネイション』や『ニュー・リパブリック』が、また、1925年の海兵隊撤退を早めた大統領選挙や国務長官の交替が、第3章でアイダホ州選出のウィリアム・E・ボラー上院外交委員長など米国議会の動きなどが、取り上げられている。また、主として第2章や8章では、第一次世界大戦に伴う国際的地位の上昇によってラテンアメリカに確固たる基盤を築いた米国が、その後のラテンアメリカのナショナリズムの高揚の中で、フーヴァー政権がニカラグア干渉政策を放棄し、さらにナチス・ドイツのラテンアメリカへの影響に対処してフランクリン・ローズヴェルトが西半球の団結のために「善隣外交」を展開しながら、中米・カリブ地域の「独善者の『善き隣人』」になってゆく過程を明らかにしている。

さらに、本書では、米国のニカラグア干渉が米西戦争以来の従属地域支配の一つの集約点であると同時に、将来の第三世界への干渉の始まりであったことが明らかにされている。米西戦争で米国は初めて海外植民地としてフィリピンを領有し、キューバを保護国とし、さらにドミニカ共和国やハイチで税関管理や軍事干渉を行った。本書に登場する米軍人の多数が、これらの米国支配地域で活動した経験を持っていたのである。

たとえば、第1章では、スモドレイ・バトラー少佐(義和団事件、ハイチ・カコ戦争)やイノック・クロウダー陸軍将軍(キューバ選挙法改正)が、第2章では「治安警察軍」の訓練にあたったキャルビン・B・カーター陸軍予備役少佐(フィリピン警察軍)が、第5章では1928年の大統領選挙管理を行ったフランク・R・マッコイ陸軍准将(キューバ選挙法改正、フィリピン占領、メキシコ懲罰遠征隊)が、第7章では、「国民警備隊」の指揮者ダグラス・C・マクドゥガル海軍大佐(ハイチ「治安警察軍」の組織者)やニカラグアにおける「海兵の対ゲリラ作戦の最も完成されたモデルを提供した」ルイス・B・プラー大尉(ガダルカナル、朝鮮戦争)が、取り上げられている。ついでに付言すると、第2章であらわれるニカラグア税関「総徴



収官」クリフォード・ハムもフィリピン・マニラ税関の輸入品検査官であった<sup>10)</sup>。また、ニカラグア干渉政策に関与したのは、軍人ばかりではなかった。1924年と1928年のニカラグア大統領選挙に関与したハルロイド・ドッズは、当時、米国で1890年代後半から市政改革の活動を続けてきた「全国市政連盟 National Municipal League」の幹事であった<sup>11)</sup>。このことは、米国の革新主義運動とニカラグア干渉政策との関係を物語るものであろう。

さらに、著者はサンディエーノ戦争で米国海兵隊が使用した武器の実態を詳細に論じて、この低強度戦争の描写をいきいきとしたものになっている。第5章においてデハヴィラント複葉機やヴォート・コルセア、カーティス・ファルコンなどの飛行機の使用、トムスン短機関銃やグリネード・ランチャーなど軽量の歩兵用銃器、そして第7章ではヘリコプターの前身たるジャイロコプターの登場、いずれも現代の対ゲリラ戦の主役である。

## V

このように本書では、サンディエーノの運動と米国の干渉の過程とが十分に論じられている。こうして本書によって日本におけるニカラグア史およびニカラグア・米国関係史研究は新たな一歩を踏み出したのであるが、あえて課題を言えば、今後、ニカラグアを含め、フィリピンやキューバ、プエルトリコ、ドミニカ共和国、ハイチで行われた選挙監視、現地軍創設政策や、金為替本位制度の樹立、経済・社会開発政策など、米国の植民地・保護国政策全体の中で本書で扱われたニカラグア政策を位置づけることが必要である。

本書は、ニカラグア政治史と米国の干渉政策の網の目を解きほぐし、「サンディエーノの戦いを等身大に描く」ことに成功した。ニカラグア社会史の研究と米国の従属国政策や世界的な農民運動史の中で、「サンディエーノの戦い」のさらに大きな姿を描き出すこともこれからの課題となろう。

最後に、ニカラグア史研究に至便と思われる文献目録をあげてこの書評

を終わりたい。

Woodward, Ralph Lee, Jr. *Nicaragua*. World Bibliographical Series ; 44. Oxford : Clio Press, 1983.

## 注釈

- 1) Larry K. Laird, *Technology versus Tradition : The Modernization of Nicaraguan Agriculture 1900-1940*, diss., U of Kansas, 1974, (Ann Arbor : UMI, 1982. 7506216) 129-30 ; Pedro Belli, *An Inquiry Concerning the Growth of Cotton Farming in Nicaragua*, diss., U of California, Berkeley, 1968, (Ann Arbor : UMI, 1969. 6914842) 47.
- 2) 加茂雄三「1920年代のラテンアメリカ」『岩波講座世界歴史』26 1970年, 310-321頁；細野昭雄・遅野井茂雄・田中高著『中米・カリブ危機の構図』有斐閣選書 1987年。
- 3) 国本伊代「日本におけるラテンアメリカ史の動向と問題点」『アメリカ史研究』2号 1979年, 38頁。
- 4) Eric J. Hobsbawm, *Bandits*, (Middlesex, Eng. : Penguin, 1969) 23.
- 5) David R. Radell, *An Historical Geography of Western Nicaragua : The Sphere of Influence of Leon, Granada and Managua, 1519-1965*, diss., U of California, Berkeley, 1969, (Ann Arbor : UMI, 1970. 7006196) 80 ; ラス・カサス著石原保徳訳『インディアス破壊を弾劾する簡略なる陳述』インディアス群書6 現代企画室 1987年, 55-60頁。
- 6) Jaime Wheelock Román, *Nicaragua : imperialismo y dictadura*, (Havana : Editorial de Ciencias Sociales, 1980) 78.
- 7) Dana G. Munro, *Five Republics of Central America : Their Political and Economic Development and their Relations with the United States*, (1915 ; New York : Russell & Russell, 1967) 274-7.
- 8) Laird 134.
- 9) Charles L. Stansifer and Richard Millett, "Nicaragua," *Research Guide*

to *Central America and the Caribbean*, ed. Kenneth J. Grieb (Madison : U of Wisconsin P, 1985) 58.

- 10) United States, Department of State, *Papers Relating to the Foreign Relations of the United States, 1911*, (Washington : GPO, 1912) 1079
- 11) Virginia L. Greer, *Charles Evans Hughes and Nicaragua, 1921-1925*, diss., U of New Mexico, 1969, (Ann Arbor : UMI, 1970. 0009726) 65 ; Robert Wiebe, *The Search for Order, 1877-1920*, (New York : Hill and Wang, 1967) 149.

